

Title	ベルクソンの「閉じた社会」論
Sub Title	La pensee bergsonienne de la 'societe close'
Author	石井, 敏夫(Ishii, Toshio)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1993
Jtitle	哲學 No.95 (1993. 7) ,p.111- 135
JaLC DOI	
Abstract	"Les deux sources de la morale et de la religion", qui est le dernier des quatre livres principaux du bergsonisme, comprend les trois themes, c'est-a-dire 'la morale', 'la religion', et 'la societe', consideree au point de vue sociologique et psychologique. Ce troisieme et dernier theme, en un mot sa philosophie de la societe consiste en deux concepts fondamentaux 'clos(e)' et 'ouvert(e)'. Ces deux concepts sont indispensables a sa philosophie de la morale, et ils sont equivalents aux deux conceptes essentiels de sa philosophie de la religion, 'statique' et 'dynamique'. Cet article a pour but d'examiner ses pensees sur la 'societe close', et chercher la signification actuelle de ses pensees. Je me propose d'étudier son traite de la 'societe close' selon les questions et titres suivants. Ces questions et titres, ainsi que leur ordre, representent la maniere dont je le comprends et l'interprete. 1. Pourquoi la societe se clot-elle elle-meme? 2. Dangers immanents a la societe. 3. Comment la societe pare-t-elle a ces dangers? 4. Interdependance de les habitudes morales dans la societe. 5. Signification du modele de 'l' organisme' dans le bergsonisme. 6. 'Societe close'. 7. Relativite de la morale dans la 'societe close'. Le but principal de cet article est d'analyser la pensee bergsonienne de la 'societe close', mais pour entrer dans l'analyse, commengons par confirmer la caracteristique de la pensee ethique de Bergson et la position de "Deux sources" dans le bergsonisme.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000095-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベルクソンの「閉じた社会」論

石 井 敏 夫*

La pensée bergsonienne de la ‘société close’

Toshio Ishii

“Les deux sources de la morale et de la religion”, qui est le dernier des quatre livres principaux du bergsonisme, comprend les trois thèmes, c'est-à-dire ‘la morale’, ‘la religion’, et ‘la société’, considérée au point de vue sociologique et psychologique. Ce troisième et dernier thème, en un mot sa philosophie de la société consiste en deux concepts fondamentaux ‘clos(e)’ et ‘ouvert(e)’. Ces deux concepts sont indispensables à sa philosophie de la morale, et ils sont équivalents aux deux conceptes essentiels de sa philosophie de la religion, ‘statique’ et ‘dynamique’. Cet article a pour but d'examiner ses pensées sur la ‘société close’, et chercher la signification actuelle de ses pensées. Je me propose d'étudier son traité de la ‘société close’ selon les questions et titres suivants. Ces questions et titres, ainsi que leur ordre, représentent la manière dont je le comprends et l'interprète.

1. Pourquoi la société se clôt-elle elle-même?
2. Dangers immanents à la société.
3. Comment la société pare-t-elle à ces dangers?
4. Interdépendance de les habitudes morales dans la société.
5. Signification du modèle de ‘l’organisme’ dans le bergsonisme.
6. ‘Société close’.
7. Relativité de la morale dans la ‘société close’.

Le but principal de cet article est d'analyser la pensée bergsonienne de la ‘société close’, mais pour entrer dans l'analyse, commençons par confirmer la caractéristique de la pensée éthique de Bergson et la position de “Deux sources” dans le bergsonisme.

* 慶應義塾大学文学部非常勤講師（倫理学）

序

ヘーゲル哲学を研究したある政治学者の手になる『歴史の終わり』という本が話題を呼んだのはまだ記憶に新しい。国際秩序の変動に伴うナショナリズムの台頭と地域紛争の頻発、ますます深刻化する地球環境汚染、難民および外国人労働者の受け入れ問題…等々、今日、新聞紙面で毎日のように取り上げられているこれら大小様々な問題は、はたして彼のいうように、今日の社会が「歴史的大転換」の時期にさしかかっていることを示す兆候として理解すべきなのだろうか。そのような見方が正しいかどうかはいずれ歴史そのものが証明することになろう。しかし、いずれにしても、上記のような「地球的問題群」を解決するためにいま求められている努力の大きさと性質とを考えてみると、現代社会を今後待ち受けているのが長く険しい道程であることは疑いえない。本稿では、今日のわれわれが対応を迫られている諸問題を考え直してみるためのよすがとして、ベルクソンの「閉じた社会」論を取り上げて検討してみたい。このような問題関心から彼の「閉じた社会」論を吟味してみると、その今日的な意義も明らかになると思われる。

第一章 「閉じた社会」論の内容を検討する前に

第一節 ベルクソンの倫理思想の基本的性格

ベルクソンの「閉じた社会」論の内容を検討するに先立って、まずベルクソン哲学の基本的立場と、そこから出てくる彼の倫理思想の基本的性格について見ておきたい。

ベルクソン哲学はしばしば生の哲学と呼ばれる。それは次のような理由による。『創造的進化』によって彼は世界的に有名な学者となったのであるが、この著作はそれまでの彼の仕事の総決算という意味合いをもっていた。『進化』は『意識の直接与件に関する試論』の持続論と『物質と記

憶』の心身論が開いた哲学的ヴィジョンを、後者の著作が準備した「生命」というテーマに定位しつつさらに深め、同時に前者の著作に含まれていた「直観」の方法を生命理論によって根拠づける試みだからである。ベルクソン哲学がふつう哲学史のなかで生の哲学として位置づけられるのは、『進化』が彼の哲学の一つの到達点と見做されているからであり、そう見做してよい理由があるからである。

彼の倫理思想は『進化』の生命哲学的知見を前提として成立している。そのことは一目瞭然である。そこで、彼の倫理思想を方向づけ、その基本的前提をなす立場は何か、という問い合わせに対しては、それは生の哲学の立場である、と述べるのが最も適當な答え方であるように思う。しかし、ここで生の哲学という場合に、ショーペンハウアーやニーチェのような哲学者の哲学を思い浮かべるのは間違いである。ベルクソンの生の哲学は彼らの生の哲学とは異なる性格のものである。とりわけ科学に対する関係が彼らの哲学とは非常に異なっている。ベルクソンの哲学は科学が分析する経験的事実から発せられる諸問題を丹念に合理的に分析する哲学なのである⁽¹⁾。

いまかりに「倫理学」というものを、人間同士の共同、さらには人間と自然との共生を可能にするロゴスの探求と定義し、「倫理思想」というものを、ある特定の立場からなされるそうしたロゴスの探求と定義するとすると、倫理学的観点から見た場合のベルクソンの倫理思想は、生の哲学の倫理思想、すなわち生の哲学の立場からなされた共同・共生のロゴスの探求として位置づけられる。

さて、彼の倫理思想全般を研究する場合、公刊された著作群のなかで必ず取り上げられねばならず、またふつう取り上げられるのは『道徳と宗教の二源泉』である。彼の「閉じた社会」論もまたこの著作で展開されている。そこで次に、ベルクソン哲学における『二源泉』の位置とその概要にも触れておこう。

ベルクソンの「閉じた社会」論

第二節 ベルクソン哲学における『二源泉』の位置

ベルクソン哲学における『二源泉』の位置というからには、本来なら『進化』以前の二つの主要著作の内容についても簡単に触れておくのが筋であるが、ここでは『進化』を前期ベルクソン哲学の到達点と見る立場から、『二源泉』の位置を『進化』との関係においてのみ見ておきたい。

『進化』における彼の結論は、地球における生命進化の歴史を統一的に理解すべく、そこに何らかの意味 (sens) を一そこに何か意味があるとすれば一読み取ろうとすると、地球における「人間」のような存在を産み出すことが、生命の存在理由と見えてくる、というものだった。生命進化の歴史は、生命がその生存条件に「ますます的確に、ますます複雑にしなやかに適応」することを通じて、物質界からの自由をますます増大させてゆく歴史なのであるが、こうした観点から見れば、脊椎動物の系列を通過して人間にまで至る進化の線にこそ、生命進化全体の「目的」が見えてくるというのである⁽²⁾。では、人間のような存在、すなわち「知性」をもつ存在の特徴は何か。ベルクソンは『進化』の第二章の最後のところで、人間のような「知的」生命の特徴をよく物語る話として次のようなエピソードを挙げている。

…ニューコメンが考案したような原始的な蒸気機関では、シリンダーに蒸気を送ったり、凝縮用の冷たい水滴を注ぎこんだりするためのコックを操作する専門の係りがついていなければならなかった。話によると、この仕事に雇われていた一少年が、そのつとめにひどく退屈したので、コックのハンドルを綱で機関のビームに連結することを思いついた。それ以来、機関はひとりでにコックを開閉するようになった。ところで、或る観察者が第二の機関の構造を第一の機関の構造と比較したとしよう。もし彼が見張り役の二人の少年に注意しなかったならば、彼はこの二つの機関の構造のあいだに、わずかな複雑さの違いをしか見いださなかつたであろう。事実、機関だけしか見ないならば、そのくらいのことしかみとめられない。

けれども、少年たちに一瞥を与えるならば、一人は見張りのために没頭し、一人は好き勝手に遊ぶことができるのがわかる。この点からすれば、二つの機関の相違は根本的である。一方の機関は注意をひきとめているが、他方の機関は注意に暇を与える。思うに、動物の脳と人間の脳とのあいだに見いだされるのは、これと同じ差異である。…⁽³⁾

人間は「機械」を作ることによって、いいかえれば物質の必然性を物質の必然性によって制御するためのメカニズムを作り出すことで、物質界からの自由を手に入れる存在である。ところで、もし、そのようなことをなしうる存在を産み出すことが生命進化の「目的」であったとすると、ここで次のような疑問が生じてくる。生命の運動は人間という種に到達してその長い進化の歴史を終えるのか、それとも人間種の出現とともに生命進化の歴史は新たな段階、新たな次元に突入するのだろうか、という疑問である。もし人間の出現が生命進化の歴史の新たな段階の開始を告げるものだとすれば、人間はこの地球上で何のために産み出されたのだろうか。およそ十年にわたって続けられた生命進化の研究を終えるにあたってベルクソンが新たに抱いた疑問はこのようなものだった。そこで彼は、人間の歴史の研究、すなわち人類が全体としてこの地球で何をしてきたかを客観的に研究する必要を感じ、人間的生命が全体として向かっている方向 (sens) を—そのような方向があるとすれば—「道徳」および「宗教」という現象のなかに探ることを思ひ立ったのである。なぜなら、道徳と宗教の歴史は人間同士を結合し、人間に生きる目的を示そうとする生の努力、文明の誕生とともに古く今日もなお続けられている生の努力と見做されるからである。このような経緯を経て『二源泉』は生まれたのである。

第三節 『二源泉』の基本的構図

『二源泉』は第一章「道徳的責務」、第二章「静的宗教」、第三章「動的宗教」、第四章「結語—機械的なものと神秘的なもの」の四つの章から成って

ベルクソンの「閉じた社会」論

いる、これら四つの章から成る『二源泉』の哲学的基本的構図を簡略化して述べると次のようになる。

ベルクソンによれば、今日の文明社会のような社会において、一般に「道徳」および「宗教」と呼ばれているものには、それぞれ本性を異にする二つの要素が含まれている。彼はそれら二つの要素の一方を「閉じた」=「静的」と呼び、他方を「開いた」=「動的」と呼ぶ。人々によって今日受け入れられ生きられている道徳も宗教も、これら異質な二つの要素の混合体である。「閉じた道徳」は「静的宗教」とともに「閉じた社会」の基礎をなす。「動的宗教」は「開いた道徳」と「開いた社会」を志向する。現実に存在する社会は「閉じた社会」の側面と「開いた社会」への志向とを合わせもつてゐる。

「閉じたもの」=「静的なもの」の源泉は「社会の圧力」、すなわち社会の各成員が互いに拘束し従属し合いながら一つの秩序を産み出す力にある。しかし、社会に秩序と連帶を打ち立てるには、各成員が必ずしも他のすべての成員によって直接に拘束される必要はない。まず、社会は一般に、各成員が極めて小さな集団に属することで、その集団を取り巻くより大きな集団におのずとはめ込まれる、という仕方で構成されている。成員全体に共有されている何らかの同質性がそのことを可能にするのである。また、例えば、「良き夫」や「良き父親」として振る舞うことは、たいていの場合、「職場」や「地域社会」の「一員」として適切に振る舞うことを構造的に含んでいる。さらに、人間の活動には「個体的なもの」と「集団的なもの」とが一体となしているような次元あるいは層が存在している。いま挙げた例でいえば、「良き夫」として振る舞うこと、あるいは「職場」の「一員」として適切に振る舞うことのうちには、個体としての自分の生を守るという意味合いが含まれており、逆に個体としての自分の生を守る営みはふつう、大小様々な集団における適切な振る舞いを前提としている。以上のような仕方で形成される社会はどれほど大きな社会であっても、やはり

「境界」をもつ社会、ある一定範囲内での一その範囲はア・プリオリに決まっているわけではないが一多様性と異質性をしか許容しない社会、すなわち「閉じた社会」となる。

「開いたもの」=「動的なもの」の源泉は「英雄の呼びかけ」、すなわち「神秘的なもの」にある。人類における神秘主義の歴史は、「境界」=人間の有限性を越えようとする魂の運動の歴史である。人間の有限性、すなわち生存の人間的諸条件を越えようとする意志は、インドにおいてそうであったように、彼岸への離脱の意志でしかない場合もあったが、最も高度な神秘主義は「開いた社会」=「境界」をもたない社会をこの世界にもたらそうとする衝動の噴出と伝播という形をとった。近代ヨーロッパにおける科学・技術（=「機械的なもの」）の出現とその進歩は、ヨーロッパの宗教における「動的なもの」、すなわち神秘主義の伝統（=「神秘的なもの」）を弱めたと一般には思われているが、ヨーロッパにおいては、神秘主義の伝統と科学・技術の発展とは何かある根源的な生の傾向の相互に補い合う二つの現れのように見える。そこでは、神秘主義が科学・技術を招き寄せ、科学・技術は神秘主義のさらなる飛躍を準備すべく現れたように見える、というわけである⁽⁴⁾。

以上のような基本的構図のなかに「閉じた社会」論は組み込まれている。

第四節 ベルクソンに「閉じた社会」論を書かせた歴史的背景

ベルクソンは「閉じた社会」論によってヨーロッパのどのような歴史状況に光をあてようとしていたのだろうか。彼は『二源泉』の第四章で第一次世界大戦の原因を分析している。テキストをここまで読み進めなければ、彼に「閉じた社会」論を書かせた背景が、ヨーロッパを焦土と化した最初の大規模な近代戦であったことが分かる。

彼によれば、戦争には「偶発的な戦争」と「本質的な戦争」とがある。前者は「征服のために征服を求める」戦争とか、「誇りを傷つけられたため

ベルクソンの「閉じた社会」論

だとか、国威や栄光を増すため」の戦争であり、後者は「それ以下の水準では勞して生きるに値せぬと思いつ込まれた一定の生活水準を保持せんがための戦争」である。第一次世界大戦は後者に属するが、それが起こった原因は結局のところ西欧文明における産業の構造にあった。土地の収穫量が人口増加に追いつかなくなると、この問題の解決は工業に求められる。過剰人口は工業労働者になるが、燃料と第一次原料が不足している場合には、外国にそれを求めざるをえない。労働者はここでいわば「国内移民」となる。従って、販路を喪失したり資源が欠乏すれば、ただちに国内に混乱が生ずる。国が必要なものを力づくで奪う決意をすれば、それで戦争となる。このようにしてヨーロッパは「力づくで奪う決意」をした「閉じた社会」の群れと化したのである⁽⁵⁾。

第二章 「閉じた社会」論

第一節 社会はなぜ自らを閉ざすのか

ベルクソンは「閉じた社会」の特徴を次のように述べている。

…われわれが生来、直接的に愛するのは今日でもやはり身内の者や同国人であって、人類愛は間接のもの、後得のものにすぎない。われわれは身内や同国人へは直通で行けるが、人類へはまわり道をしなければ達することができない。… (ds, 28)

…強い社会結合は、大部分、ある社会が他の社会に対して自衛する必要に基づいているということ、またわれわれがいっしょに生活している人々を愛するのは、まずそれ以外の人々に対抗したことだ、ということの分からぬ人があろうか。… (ds, 28)

…社会が呼集をかけて紀律を与えた人間が、幾世紀にもわたる文明の成果をその社会からよしどれほど与えられていようとも、社会は依然としてその原始的本能を必要としており、社会はいわばこの本能を厚いニスで覆っているだけなのである。… (ds, 27) [傍線石井]

筆者の見るところでは、「閉じた社会」に関するベルクソンの所説のなかで最も本質的かつ興味深い部分は、この最後の引用に見られるものである。「身内の者」や「同国人」に対する生来の、直接的な愛は、よそ者や外国人をいわば本能的に締め出す性質のものであり、その点でそのような愛はまさしく「原始的本能」なのであるが、文明が発達してどれほど「人類愛」や「愛他心」が人間の徳として賞揚されても、社会は依然としてそのような本能を必要としていることに変わりない、というのである。

では、そもそも社会はなぜ今日でもそのような本能を必要としているのだろうか。すなわち、社会はなぜ今日でもやはり自らを閉ざさざるをえないのだろうか。このことを明らかにするにはまず、社会生活が地球上に出現して以来今日に至るまで、社会がずっと恐れてきた事態、いいかえれば社会が絶えず危険視してきた事態がどのようなものであるかを考えてみなければならないのである。

第二節 社会に内在する危険

社会を外側から社会学的に観察してみると、それは「一個の有機的組織」、「要素相互間の、互角な関係での協調」、あるいはまた「相互の従属関係」と見える。こうした「組織」ないしは「関係」のもつ最も基本的な役割がどのようなものであるかは、社会をその始原状態において、すなわち原始状態の社会を思い描いてみればおよそ検討がつく。原始社会を取り巻いていたのは予測を許さない裸の自然、當てにしようにも當てにならない生の自然であり、そのような状況のなかで社会に課せられていた課題は、苛酷な自然を相手にすべての成員を養うのに足るだけの糧を獲得することだった。人々はめいめい勝手にこの仕事を行うこともできたであろうが、この仕事は共同で分業体制のもとに行うほうがより能率的であり、また自然でもあった。

…この仕事（生存の営み）が特殊化すればするほど、つまり互いに補い

ペルクソンの「閉じた社会」論

合う資格の違った働き手の間の分業が進むにつれて、この仕事の能率はそれだけ高まってゆく。してみれば、社会生活は、本能のうちに知性のうちにも漠然たる理想の形で宿っているわけであって、この理想の最も完全な実現が、一方では蜂の巣や蟻塚に見られ、他方では大小様々な人間社会に見られるわけである。… (ds, 22)

ところで、「協調」ないし「従属」関係の乱れ、あるいは弱体化は、ただちに社会全体の存続の危機を招くのであるから、社会はどのような手段を用いても成員間の「協調」および「従属」関係を堅固な状態に保たなければならない。容易に予想されるように、社会秩序を危機に陥れる可能性のある要因は、社会の外部にも社会の内部にも様々に存在している。しかし、社会にとってより本質的な意味で危険であるのは、社会の内部に存在している危険である。社会の外部に存在する危険が社会にとって本当に危険なものとなるのは、当の社会がその内側から危機に見舞われている場合だからである。では、社会は自らの内部にどのような危険因子を抱えているのだろうか。

社会が何よりもまず恐れているのは個人のエゴイズムである。社会を構成する成員が好き勝手に振る舞えば、秩序はたちまちにして崩壊する。秩序を乱し法を踏みにじる個人に対しては、社会がただちに処罰、追放、抹殺等の処置を講ずるのはそのためである。しかし、社会はふつう個人をそのような窮地に追い込むまで放置しておくことはない。社会は個人をそのような窮地に追い込む前に、彼のエゴイズムへの傾向を予期し、あらかじめそれに備えるのである。社会はそのことをある意味では極めて自然な仕方で一「自然」に訴えつつ、といいかえてもよい一行うので、それと注意しなければ見過ごしてしまうほどである。社会生活を始めるとすぐに、子供は親や先生の言いつけに従う習慣を身につける。まず、この種の習慣は個人的なものではない。それがいつ、どのような仕方で身につけられたかは、おそらく本人にも親にも正確には思い起こすことのできない習慣である。

さらに、それは個人的な生活習慣とは違って、勝手気ままに廃棄することのできない習慣もある。社会は自らのうちに一人の人間を迎える際に、人間にその素質が生まれながらに備わっているこの種の習慣に訴えることによって、事を為すのである。社会が個人をこのような仕方で教育する必要性は、エゴイズムというものが人間存在に深く根差した現象であることを物語っている。社会生活の入り口に立った個人、いいかえれば社会がこれから自らの一員として迎え入れるべく働きかけ始めたその個人は、エゴイズムへの傾きを隠し持つ存在と見做されているわけである。

…何でもなすがままにさせておいてもらえるのであったなら、私たちの子供のころはいったいどうなっていただろう。私たちは楽しみから楽しみへと飛びまわっていただろう。だが、見ることも触れることもできない障害が立ちはだかっていた。一「～してはいけない」という禁止がそれである。それにしても私たちがその禁止に従ったのはなぜだろう。こうした疑問が萌すことはついぞなかった。両親や先生がたの仰せどおりにする習慣ができてしまっていた。… (ds, 1) [傍線石井]

しかし、社会がエゴイズム以上に危険視している事態がある。それは個人が生きる意欲を喪失したり、あるいは著しく衰弱させてしまうことである。個人が生きる意欲を失うことは、それがいかなる原因によって引き起こされるのであれ、エゴイズムよりも社会にとってはもっと危険な事態である。エゴイズムは秩序からの逸脱ではあっても、生命からの逸脱ではない。だが、生存意欲の喪失あるいは衰弱は、生命そのものからの逸脱であり、生命そのものを否定することへと導かれる可能性があるからである。

…自分の力（生きる力）は大部分が社会から来ているということ、またエネルギーのたえざる緊張にせよ、努力の方向の一定性—それによって自分の活動に最も高い利益が保証される一にせよ、それらは社会生活がたえず要求を新たにしてくれるおかげだということ、こうしたことは誰しもよく心得ている… (ds, 8) [傍線石井]

ベルクソンの「閉じた社会」論

ベルクソンの言を待つまでもなく、エゴイズムも生存意欲の喪失という事態も、人間存在に深く根差した現象であることが推測される⁽⁶⁾。ベルクソンはこれらの現象の構造とその意味を分析してはいないが、少なくとも、これらの現象は「知性」の出現とともに世界に出現したと考えているようである。従って、社会のうちに潜在してその秩序を一時的に損ない、あるいは根元から衰弱させうる力は、人間社会の本質的な構成要素である「知性」とともに社会のうちに導き入れられたものであり、人間が「知性的」であり続ける限りは、人間社会のうちに潜在し続けるものということになる。

第三節 社会はこれらの危険にどのような仕方で備えているか

ベルクソンの考えでは、エゴイズムも生存意欲の喪失という事態も、知的存在としての人間の在り方に不可分な現象である。では、知性をその本質的な構成要素としている社会は、これらの危険に対してどのような備えをなしているのだろうか。以下では、この問い合わせて次の二つの観点から、すなわち記述心理学的観点と社会学的観点からアプローチしてみよう。この二つの観点は「閉じた社会」をめぐるベルクソンの分析のなかに交互に現れてくるものである。

内側から心理学的に捉えられ反省されるとき、社会はどのような姿を呈して現れてくるだろうか。つまり、人々の意識に生きられているがままの社会とはどのような社会であろうか。ベルクソンは社会が人々の意識に生きられ、人々の意識に現れる様態を典型的に示すものとして、次のような三つの場面を取り上げている。第一は、社会生活が習慣的な仕方で生きられている場合。第二は、個人がたまたま社会の外部に放り出される場合。第三は、個人が社会のなかで絶対的な意味での孤独を感じさせられる場合。以上の三つの場面をテキストからの引用によって見ておこう。

社会を意識するということが、社会に対する自分の責務をはっきり意識

し、他人に対する義務をいちいち思い浮かべることであるなら、社会生活とは、通常は、ほとんど習慣的に、なれば無意識的な仕方で生きられているものといえる。

…普段われわれは自分の責務をよく守っており、自分の責務をことさらに考えてみたりはしない。かりに四六時中いつも義務の観念を喚起し、これを整った法式に言い表わさねばならぬとすれば、自分の義務を果たすということは、現実よりもはるかに煩わしい事柄となるはずである。だが、
事実は習慣でたくさんなのだ。 そしてわれわれが社会の期待に答えるためには、たいていは為したいように振る舞っていればよい。…(ds, 11~2)

[傍線石井]

しかし、ある例外的な状況においては、意識の底に潜在し、意識の眼からほとんど消えかかっていた社会がはっきり意識に上り、社会に対する個人の強い結合があらわになる。こうした状況の典型としてベルクソンはロビンソン・クルーソーの例を挙げている。

…孤島のロビンソン・クルーソーも、実は物質的にすら、相変わらず他の人々と接触し続けているのである。なぜなら彼は、難破船から人間の手になる品物をいくつとなく拾い上げており、それがなくてはやってもゆけまいが、こうした品物は、ロビンソンを文明の圈内、従ってまた社会の圈内へ繋ぎとめている、といわねばならない。だが、ロビンソンにとってそれ以上に必要なのは精神的接触である。なぜなら、たえず新たに起こってくる困難に、限界が自分で分かっている個人の力だけをしか振り向かれては、やがて彼は意氣喪失してしまうであろう。こうして彼は、心のなかでは依然として離れずにいる社会からエネルギーを汲むのである。…(ds,

9) [傍線石井]

ただ一人無人島に暮らしているよりももっと激しい孤独が、従ってまた社会に対する個人の内的依存がもっと強烈に経験される場合もある。誰にも見つからず首尾よく犯罪をなし遂げてしまった「大罪人」の感情には、

ベルクソンの「閉じた社会」論

そのような孤独が潜んでいる、とベルクソンはいう⁽⁷⁾。

…彼が犯跡を拭い去って身を保ちたく思っている社会から、ますます強く彼を追放するのは、ほかならぬ自らの罪の覚えである。というのは、世間が変わらぬ敬意を示してくれる人間は、かつての自分であって、もはや今の自分とは別人なのだから。つまり、社会が話しかけているのは、実はもはや彼に対してではなく、自分とは別の人物に話しかけているわけである。現実の自分をありのままに知っている彼は、世人といっしょにいても、ただ独り無人島に暮らしている以上の孤独を感じる。なぜなら、孤独でいても、心のうちに社会の心像 (image) を連れて歩いていれば、これが自分を取り巻き、支えてくれるだろうが、今はもの (chose) としての社会からだけではなく、その心像からも断ち切られてしまったのだから。… (ds, 11) [傍線石井]

以上の三つの引用から明らかになることは、ベルクソンが、個人を社会に繋ぎとめている力は、通常はほとんど意識されないでいるが、個人が社会からの断絶を強く意識する場合には、個人を社会に繋ぎとめているその力が、個人の生命力の隠れた源泉として強く意識されるに違いない、と考えていることである。以上の引用からだけでも、個人におけるエゴイズムへの傾きと生存意欲喪失の可能性に対する社会の備えが、およそどのようなものであるかは、だいたい検討がつくのであるが、この点についていっそうはっきりとした理解を得るには、社会を以上のような意識経験をもつ多数の個人から成る「一個の有機的組織」として、もう一度外側から社会学的に捉え直してみなければならない。

第四節 道徳的習慣は相互に支えあっている

ベルクソンによれば、「とりわけカントに繋がる人たち」は、道徳的義務というものを、義務に反する欲望や傾向性への抵抗の努力として経験される場面でのみ捉える傾向がある。例えば、嘘をつくな、という道徳的掟を、

嘘をつくことがむしろ通常の感覚では自然であり、また善いこととすら感じられる状況のなかでも守るべきか、などといった問いの立て方には、道徳のそうした捉え方が如実に現れている。しかし、嘘をつかない、ということのもっと日常的なレベルが存在するのであって、そうしたレベルではほとんどの場合、「捷」を守っているという意識すら希薄な状態で捷が守られているのである。ベルクソンによれば、社会生活における義務の大半はそのような仕方で遂行されている。道徳は理性の鏡に映し出される観念の体系としてよりもまず、多数の個人が実践的に関与する習慣の体系として存在するのである。いま試みに、約束を守る、ということの実例を探そうとすれば、社会生活の至るところに簡単にそれを見つけることができるだろう。例えば、定時に出社する、門限に遅れない、レポートの提出期限を守る…など。これらの義務＝習慣は他の道徳的といってよい義務＝習慣と相互に緊密に関連し合っている点にその特徴がある。例えば、定時出勤するということは、会社の同僚に迷惑をかけないということであり、会社における自身の立場を危うくしないということであり、もし彼に妻子があるなら、家族の生活を保証するということであり、それは結局のところ自分自身の生を守ることなのである。これらの日常的に遂行されている義務は、必要な場合には観念として表象されうるが、何よりもまず一個の習慣として生きられている。特定の社会習慣を身につけ、それを維持することが、自分の属している小さな集団に対して一定の責務を果たすことなのであり、また、そのような仕方で責務を果たすことが、結局は自分自身の生を守ることなのである。ここから、個人が一つの些細な義務を怠ることで、社会とその個人との間にただちに緊張関係が生ずるということ、しかし、習慣の力はしばしば迅速にその個人を秩序に復帰させるということ、また、どのような義務であっても、秩序形成に不可欠な習慣として習慣体系のなかに組み込まれるなら、比較的容易に遂行されるということ、以上のことことがよく理解できるのである。

ベルクソンの「閉じた社会」論

要するに、社会の各成員のこのように習慣化された義務遂行は、その成員の周囲を取り巻く他の成員の同じく習慣化された義務遂行と、いわば切れ目のない連続的な織物をなしているのである。各個人によって表象され理解され反省されるときには観念の体系として現れてくる道徳も、通常は、習慣の一大組織として、多数の個人によって、いわば「個人的」ということと「社会的」ということとが一体をなしているよう仕方で生きられているのである。

…われわれ各人は、自分自身に属しているのに劣らず、社会にもまた属している。

(…)(自分の)表層では誰しも自分以外の人たちと連続しており、互いに似たり寄ったりのものである。また、そうした人々との相互依存をつくり出す紀律によって、他の人々へと統合されている。…(ds, 7)

第五節 有機体モデル

ベルクソンが「閉じた社会」の分析に有機体モデルを導入するのはまさにこの点においてである。ベルクソンによれば、社会と個人の関係は、有機体とその体をつくりあげている細胞との関係に酷似しているのである。

…われわれは社会を哲学的に考察し、数多い細胞からなる一個の有機体になぞらえるだろうが、目に見えぬ繋がりによって結ばれたこうした細胞は、互いに従属し合ってみごとな階層組織をつくり、当然また、すべてが全体の利益のために一つの紀律に服してもいるとして、この紀律には部分の犠牲を要求する力が備わっていよう。(…)
そして多かれ少なかれ人為的なこの有機体にあって習慣の果たしている役割は、必然性が自然のうちに果たしている役割と同じである。…(ds, 1~2)

有機体は、自らの維持に役立つようプログラムされた要素以外の要素の侵入に対しては、激しい拒絶反応を示す。有機体にとっては、自らの存続に寄与するものとしないものとの区別ははっきりしている。それに対して、

ある一つの社会の繁栄とその維持を可能にするものが何かということはア・プリオリに決定されていない。初めは社会を脅かすように見えたものが、社会の繁栄に寄与するということは起こりうるし、その逆も起こりうる。しかし、どれほどオープンな社会においても、その社会にとって異質な要素は、それが何らかの制度や機構を通じて同化されうる限りでのみ、受け入れられるのであり、受け入れの基準は、少なくとも当の社会に損失や危機をもたらすことがないという点に置かれるだろう。社会における成員間の関係を有機体内の細胞間の関係になぞらえることのできるいま一つの理由は、いま分析の対象となっている社会が「同質性」に基盤を置く「閉じた」組織をなしているという点にあるのである。

第六節 「閉じた社会」

社会は分業の効率を高め、同時に、必要な場合には個人のエゴイズムとその生存意欲喪失の危険に対する備え、としても働くよう配慮して、緊密な習慣体系を形成するのであるが、このように見てくれれば、こうした習慣体系それ自体が、社会を一つの「境界」をもつ閉じた「世界」たらしめる傾きをもつことが分かる。一般に、よい意味でも悪い意味でも、個人の感情、意志、行動を最も左右しうるのは、彼を直接に取り巻く人々一家族や友人や恩師や同僚など一であろう。だからこそ、エゴイズムも生存意欲の喪失という事態も、たいていの場合は、それら身近な人々との日々の生活一覧いだり、遊んだり、喋ったり、働いたり、といった最もふつうの意味での生活一のなかで抑制され回避されるのである。

ところで、いま見たように、自分を直接取り巻く周囲の人々に対する道徳的忠誠が、自分の直接属する小集団が属している大集団に対する社会的忠誠となりうるとすれば、それはその人が直接属する小さな集団と、その人が観念の上でのみ属している大きな集団との間に、何らかの「同質性」があるからである。

ベルクソンの「閉じた社会」論

…社会は、われわれと社会との間に中間項を挿入し、事態をことのほかやりやすくしてくれている。われわれには家族があり、職業だの専門だのがある。また自分の村や区や府県にも属している。こうしたグループが社会のうちにしっかりとはまり込んでいれば、せいぜいグループに対する務めをきちんと果たしてさえいれば、それで社会に対する務めはすんでしまう。 … (ds, 12) [傍線石井]

今日の文明社会のような大規模な社会においても、その基盤をなしているのは家族や友人や仕事仲間といった身近な人間関係であることに変わりはない。社会には、「知性」に固有の危険に備えつつ成員を結束させるための、それとは異なる方法が見つからなかつたのである。しかし、この方法に基づいて社会を拡大化してゆく道はあった。共有された言語、生活様式、道徳観、制度等、要するに集団を秩序づけうる何らかの「同質性」がそのことを可能にしたのである。しかし、このような仕方で形成される社会はどれほど拡大化しても「閉じた社会」であることに変わりはないだろう。

第七節 「閉じた社会」における道徳の相対性

今日の文明社会のような社会では、社会を秩序づける紀律の内容は合理性と論理的な整合性をもつてゐる。社会が今日このような成果を手に入れることができたのは、まず初めに根本をなす二、三の原理が社会構築の土台として採用され、それを基にして経験の積み重ねと論理的整合性の追求が不斷になされてきたからである。今日では「全体」の繁栄と福祉に役立たないような義務はますます社会から放逐される傾向にある。ところで、ここでいう「全体」が何を意味しているかを知るには、平和時の社会だけでなく、戦時の社会をも見なければならない、とベルクソンはいう。

…実際、他人の生命、財産を尊重する義務は社会生活の基本的 requirement だ、とわれわれはいうが、この場合、われわれはいったいどういう社会のことをいっているのだろうか。これに答えるためには、戦時にどういうことが

行われるかを考えてみれば十分である。裏切り、瞞着、欺騙はもともり、殺人や略奪さえもたんに合法とされるばかりではない。それらは何と手柄なのである。… (ds, 26)

ま と め

ここまで引用を交えながらベルクソンの「閉じた社会」論を見てきたが、以上の考察を要約的に述べると次のようになる。

社会が目指しているのは成員間の結束である。苛酷な自然にさらされていった原始社会において、成員の結束が何を意味し、結束の乱れが何を意味したかは明らかである。こうして「捷」の必要性が理解される。しかし、人間知性に固有な危険が社会の内部には常に潜在しているので、社会が成員の堅固な結束を望む場合には、その危険に対する備えもなさなければならない。社会は成員間の結束を危うくする要因、すなわちエゴイズムと生存意欲喪失の危険にも備えなければならないのである。これらの危険は人間が「知性的」であり続ける限り、社会の内部にいつまでも潜み続ける。従って、社会の拡大化・文明化とともにどのようなタイプの小集団が新たに形成されても、それら小集団は効率的な分業を目指すと同時に、社会に内在するそれらの危険に対する備えとしても機能するはずである。まず、社会形成への意志は「本能」に基づく「小さな集団」、すなわち「家族」のような血縁共同体や、「村」のような地縁共同体を無数に配置することから始める。そして、社会は何らかの「同質性」を基にしてそれらの小集団を徐々に統合してゆくが、その統合過程のなかで今度は、「職場」や「専門」や「コミュニティー」といった新たなタイプの小集団が、分業の効率を高めるという意図を前面に掲げて出現してくる。しかし、どのような小集団が新たに形成されても、社会には依然として同じ危険が潜み続けており、社会は自らのうちに潜み続けているその危険に対して慎重な配慮を怠ってはならないのである。このようにして形成される社会が、それが包含

ベルクソンの「閉じた社会」論

している無数の小集団とともに、「一定数の個人を包容するだけで、他の個人を締め出す」ことは避けられないである。

最後に、以上に見たベルクソンの「閉じた社会」論の見地から、今日の社会が現実に直面しているいくつかの問題を見ておきたい。筆者には、今日の社会が対応を迫られている諸問題の具体的な解決策を提示する力はない。以下の考察ではただ、生の哲学の倫理思想の立場に基づくベルクソンの「閉じた社会」論の見地から、それらの問題の意味を改めて考え方直してみるにすぎない。

第三章 「閉じた社会」論の見地から見た今日の社会の諸問題

第一節 今日の社会

今日の日本のような社会においても、無数の小集団が個別的にもつ比較的に安定した連帶関係が、誰の目にも映じたことのない「社会全体」の基礎をなしている。それは、有機体全体の基礎が、健康な組織や正常に機能する器官であるのとある意味では似ている。しかし、一定の同質性を基礎とする社会においても、その社会に存在する二つの異なる小集団にそれぞれ属している成員同士の関係は、それぞれの小集団内部での成員同士の連帶関係ほどには堅固なものではありえない。ベルクソンの「閉じた社会」論の見地から見ると、今日の日本の社会のような社会もやはり「閉じた社会」の構造をもっており、極度に巨大化した閉じた社会に固有の危険を抱えもっている。

第二節 今日の社会の諸問題の本質

知性という意識形態をえた存在によって構成される集団の秩序維持の最も基本的なやり方は、その集団がどれほど大規模化し複雑化しても、いつも同じである。個人は彼が日々の生活を通じて現実にかかわっている小

集団一通常は複数の一に属することによって、「社会全体」に属している。自分がそのなかで暮らしている小集団に属することが、同時に「社会全体」に属することでありうるのは、自分が具体的な生活を通じて属している集団と、諸々の制度や機構を媒介として観念の上でのみ共同している他の無数の小集団との間に、何らかの同質性が前提されているからである。ところが、社会はいつも小さな集団を基本的な単位として自らを構成せざるをえない点に、またそれら小集団を無理なく統合するには何らかの同質性一共有された言語、道徳観、価値観、制度等一が不可欠である点に、要するに社会体を可能にする二つの基本的条件はいついかなる状況においても変わりようがない点に、今日の社会の苦しみがあるのである。以下では、本稿の冒頭で触れた三つの問題について見ておきたい。

第三節 外国人労働者の問題

駅のホームで、あるいは電車のなかで、アジア系の外国人に電車の行き先を尋ねられた経験のある人は多いだろう。都心部の公園で多くの外国人がたむろしているのを見かけたことのある人も多いだろう。筆者の生活の範囲内といえば、都内の盛り場や東京周辺部の人口密度の高い地域の飲食店で働く外国人労働者にしばしば遭遇する。こうした場所で見かける外国人の国籍は実に様々であるから、彼らの生活様式も多種多様であることが推察される。彼らの日本語力は、仕事や買い物等に必要な簡単な言葉の遣り取りを除けば、さほど高いものとは感じられない。

彼ら外国人労働者を我が国に導き入れ一他の先進諸国に比べてその数は少ないとはいえ一、彼らに一定水準の生活と身分を保証しているのは、人類全体への福祉の観念と、受け入れを可能にする今日の日本の経済力と、経済力の結果として生じた労働一般についての観念の変化である。しかし、現在の東ドイツのように、深刻な不況になれば、彼らと日本社会との間の、あるいは彼ら自身の間の違いや溝がよりいっそう顕在化していくことは間

ベルクソンの「閉じた社会」論

違いない。経済状況が極端に悪化すれば、職場以外の場所での彼らの生活がいまほど安全なものではなくなる可能性は皆無とはいえない。日本が今後、この問題に関してどのような道を選択するかは分からぬが、いかなる状況下においても彼らの受け入れを続行し、彼らの身分と生活の安全を保証しようとするなら、彼らを、社会を構成する様々なレベルの小集団のなかに徐々に組み込んでゆく必要がある。例えば、彼らの子弟を彼らが生活する各コミュニティーの様々な施設—例えば教育施設や医療施設—で受け入れる必要などである⁽⁸⁾。

第四節 地球環境汚染の問題

個人は必ず何らかの集団に属しており、その集団自体がさらに何らかの集団に属しており、以下そのように続いてついには「社会全体」に至る。ある国が民主主義を採用している場合には、国家は社会を地理的条件に基づいて人為的に複数の集団に分割し、それら集団の利益を代表する人を選挙によって決定する。地球環境汚染の問題が指摘されて久しいが、この問題への対応がひどく立ち遅れている理由の一つとして、民主主義のもつ性格が挙げられる⁽⁹⁾。選挙民が政治家を選ぶ際の基準はふつう、隣接する地域よりも自分が属する地域にどれだけの利益をもたらしうるかに置かれ、人類全体というよりも国にどれだけの貢献をなしうるかに置かれている。今日の環境汚染の問題は、一つの地域を越え、一つの国を越えて、地球全体の運命にかかる緊急の問題となっており、グローバルな仕方での迅速な対応を迫られているのであるが、このような問題が選挙戦の争点となることは稀であり、たとえ取り上げられても、問題への対応が地元の利益を明らかに左右するような場合を除いては、妙に現実離れした感じ—實際には切迫した現実の問題であるのに一を伴うのが常である。このような奇妙な状況は社会が初めてこのような性格の問題に直面したことからくる戸惑いにもよるのであろうが、社会の基をなしている基本的原理の比較的不变

な性格を考えてみると、ある程度は避けられない現象のようにも思われる。

第五節 ナショナリズムの問題

東ドイツの各地でネオナチが暴挙を働いているのは、ナチズムに対する戦後ドイツの反省から進められてきた難民の積極的な受け入れー現在ドイツの外国人労働者は 50 万人といわれ、その数は他のヨーロッパ諸国と比べて群を抜いているー政策が、冷戦構造の終結による東西ドイツの統合によって生じた東ドイツの不況と失業率急増の原因と見做されたためである。過去のウルトラナショナリズムに対する反省の意味も込めてなされてきた政策が、新たなナショナリズムを刺激しつつあるということはまったく歴史の皮肉というほかない。一定水準の衣食住を得られないことへの不満と将来に対する不安が、明らかな社会的矛盾に直面させられると、こうした矛盾の原因をどうしても手近に認められる要因に帰してしまいがちである。この問題の解決がー外国人住宅の焼き打ちではなくー東ドイツの経済立て直しにかかっていることはいうまでもないーネオナチもこの点はよく心得ているーが、難民や外国人労働者の問題は結局のところ国際秩序の不安定と国家間の経済力の著しい格差からくるのであり、これらの問題の根本的な解決に向けて先進諸国間の協力体制がよりいっそう拡大強化されない限り、ナショナリズムへの動きはーそれほど大きなものにはならないにしても一止むことがないだろう。

以上の三つの問題のどれをとっても、その解決の鍵は、社会構成の基本的原理をなす「同質性」を、どのようにすれば「境界」の彼方にまで拡張し浸透させてゆけるか、あるいは「境界」内の「同質性」をどの程度相対化できるか、という点にある。どうすれば外国人労働者を不当な不利益から守り、その安全を保証できるかということは、彼らをどのようにすれば地域社会に組み込むことができるかという問題である。地球環境汚染

ベルクソンの「閉じた社会」論

問題や国家間の経済格差の問題を解決できるかどうかは、主要先進国が一定の道徳観と価値観を共有した上で持続的な協力体制を確立できるかどうかにかかっている。ナショナリズムや経済優先主義が今後の国際社会の基礎をなすべき「同質性」の内実をなしえないことは明らかである。また、異文化主義が地球規模の問題に適切に対処できるかどうかにも疑問である。ベルクソンの「閉じた社会」論をわざわざ取り上げるまでもなく、それだけは確かなことといえそうであるが、彼の「閉じた社会」論が興味深く、また現代の諸問題を考える上で示唆的でもあるのは、社会構成の基本的原理として「小さな集団」と「同質性」が必然でもあり不可欠でもある理由を、「知的」存在についての心理学的知見を踏まえた上で明らかにしている点である。「小さな集団」と「同質性」をたよりにして、社会秩序を乱すものとしての個人のエゴイズムと社会の命をその根底から脅かすものとしての個人の生存意欲の喪失という事態に対する配慮が常になされなければならないとする、知的存 在における秩序形成の働き一般が「異質性」や「多様性」を「本能的に」嫌うのはある意味では極めて自然なことなのである。従って、もし社会に内在するエゴイズムと生存意欲喪失の危険を回避するためのまったく別の方法が何も存在しないなら、今日の社会は上記のどの問題を解決しようとする場合にも、自らのうちに潜むこうした「本能」の抵抗をいつも予期していなければならぬだろう⁽¹⁰⁾。

註

『道徳と宗教の二源泉』からの引用はすべて puf の Quadrige 版からのものである。本文中では ds の略号で示した。

- (1) C. トレスモンタン, 豊田仁美訳, 『哲学の方法』, 第三文明社, レグルス文庫, 1985, 96-128.
- (2) H. Bergson, L'évolution créatrice, puf, introduction/chap. II.
- (3) ibid., 185-6.
- (4) ベルクソンによれば, 中世ヨーロッパを支配したのは「禁欲」の理想だった。禁欲主義が一般に「神秘的なもの」への志向と強く結びついていること

はよく知られているが、ヨーロッパにおいては、長い禁欲主義の時代の後に今まで続いている科学・技術の時代が到来したということ、科学・技術はなるほどヨーロッパにおける「神秘的なもの」の伝統を弱める面がないとはいえないが、人間を苛酷な労働条件から部分的に解放した点では人間の魂が躍動しうるきっかけをつくったということ、以上の二つの点からベルクソンは、「機械的なもの」と「神秘的なもの」とはヨーロッパにおいては互いに補い合う関係にあると見るのである。いま「科学・技術」とひとと言でいったが、厳密にいうと、ベルクソンは科学と技術を同じ本質のものとは見做していない。また、技術が社会的公平を生み出すことに必ずしも寄与してこなかったという歴史の事実は、必ずしも技術の本質から出ることではないと彼は考えている。なお、「補い合う」という概念については『進化』の第二章を参照のこと。

- (5) H. Bergson, *Les deux sources de la morale et de la religion*, puf, 305-8.
- (6) V. フランクルの『夜と霧ードイツ強制収容所の体験記録』(みすず書房, 1961) に記録されている、極度に異常な状況下における人間の様々な振る舞いは、社会にとってこの上なく危険なこれらの現実が人間存在の奥底に常に潜在していることを示唆するものである。
- (7) ベルクソンがここで思い描いているのは『罪と罰』のラスコーリニコフの心理らしい。
- (8) 外国人労働者問題との関連で見た地方自治体の今後の役割について詳しい議論を知りたい方は、神奈川県労働部労政課の企画によって 1991 年の 11 月に横浜で開催された国際シンポジウム「外国人労働者問題」の記録を参照されたい。この記録は明石書店からシリーズ外国人労働者⑤『外国人労働者と自治体』というタイトルで出版されている。
- (9) アレキサンダー・キング/ベルトラン・シュナイダー, 田草川弘訳, 『第一次地球革命』ローマクラブ・リポート, 朝日新聞社, 1992, 128-143.
- (10) E. フロムは “The heart of man: Its genius for good and evil” (『悪について』, 紀伊國屋書店, 1965) のなかで社会病理を心理学的観点から「ネクロフィリア」, 「ナルチシズム」, 「近親相姦」の三つに分類しているが、これらはみな「閉じた社会」のネクロフィラスな形態と見ることができる。「開いた社会」が一つの「理念的極限」であることはベルクソン自身も認めている。彼の問題意識をフロムの言葉を用いて表現すれば、複数の「閉じた社会」同士がいかにしてバイオフィラスな関係を打ち立てるかという点にある。ティヤール・ド・シャルダンの『現象としての人間』をこの問題に対する一つの解答の試みとして読むことは可能である。